

太平洋イカ類漁場調査 — 抄録 —

(東奥丸：イカ類漁場調査・開運丸：アカイカ漁場調査)

鈴木史紀・田中裕憲

発表誌名

イカ釣り漁場開発資料17号(平成4年5月)及び平成3年度外洋性イカ(スルメイカ・アカイカ)に関する生物測定・標識放流・海洋観測基礎資料集(平成4年5月)

抄 録

平成3年6月から11月に東経155度以西の太平洋海域のスルメイカ・アカイカの北上期から南下期の群を対象に試験船東奥丸、開運丸で漁場調査を実施した。

1. スルメイカの水揚げ動向について

八戸港での沿岸スルメイカの水揚げ量は4,580トンで昨年の147%増、また、cpue(1隻1操業当り漁獲量)は613kgで昨年の154%で、ここ10年間では最も高い水準にあった。また、初漁日は6月21日で昨年並みであった。

大畑港での水揚げ量は1,634トンで、好漁であった昨年の83%と低調であったものの、ここ10年間では中位の水準にあった。cpue(1隻1操業当り漁獲量)は303kgで昨年並みで、ここ10年間では高い水準にあった。

2. スルメイカの来遊資源について

6月、8月のイカ類漁場一斉調査等の分布状況・外套長組成には、資源豊度の高かった年代と同様の傾向がみられた。このことから、本県太平洋沿岸並びに沖合域に今期来遊したスルメイカは太平洋を北上した群れで形成されていたものと考えられる。

3. アカイカの水揚げ動向について

近海域における氷蔵アカイカの水揚げ量(八戸港)は190トンで'90年の32倍であったが依然低調である。また、釣り漁場からの凍結アカイカの水揚げ量(八戸港)は5,157トンで'90年の52%と低調であった。

4. アカイカの資源構成について

沿岸域には8月に入ってから、沖合域には7月頃からアカイカの来遊がみられた。また、来遊資源は沿岸域(東経147.5度以西)では単一に発生した群で構成されていたが、沖合域のB海域(東経147.5度から152.5度間)では発生時期を異にした群で構成されていた。一方、沖合域のC海域(東経152.5度以东)では小型の単一群主体で構成され、大型イカは少なかった。